

第十七節 第五高等中学校と医学部

第五高等中学校は創業の際、遠大な抱負で予科第三級に入学した二十四名と六十一名の仮入学者中、学業に努力を続け、首尾よく業を了えた一部法科生四名、同文科生二名、二部工科生五名、同理科生三名、合計十四名の人々に対する晴れの第一回卒業式を行なった。それは明治二十五年七月十日、午前九時から、雨天体操場を式場として挙行された。僅か十四名であつたが、この際、職員生徒及び本館玄関事務室の入口には国旗を掲げ、午前九時十分、職員生徒及び知事・師団長・貴衆両議員・県会常置委員・諸官衙・学校その他の来賓一同着席後、直ちに校長嘉納治五郎は学事の状況を報じた後、順次卒業証書を授与し、次ぎに告示を与え、終つて卒業生総代武藤虎太の答辭、教員総代桜井房記の演述、医学部主事吉田健康、生徒総代甲斐一之、松平熊本県知事、茨木陸軍少將の諸氏の祝辭、朗誦があり、次に元本校教諭福井彦

次郎の演説を最後に式を了つた。ここに吉田健康の卒業式の祝辭を示そう。

医学部主事祝詞

本日第五高等中学校本科諸子へ定期ノ試験ヲ経テ、茲ニ卒業証書ヲ授与セラレタリ。不肖健康、職ヲ医学部主事ニ承クルヲ以テ、卒業生諸子ノタメ、一言以テ祝セザルヲ得ザルナリ。第五高等中学校ハ明治十九年勅令第十五号ニ基キ、設置セラレタルモノニシテ、卒業生諸子ハ本校創立ヨリ今日ニ至ル幾多ノ星霜ヲ経テ、其学ヲ所、智徳修養ノ完成ヲ期シ、今ヤ諸子ハ多年勤学ノ効空シカラズシテ、此卒業証書ヲ受ケラル、ニ至リシハ、実ニ諸子ノ名譽大ナリト謂ツベシ。又諸子ノ今日マデ学ビ来ル所ノ能力ハ即チ国家ノ光華ナリ。然リ而テ、諸子ハ之ヨリ益ス進ンデ大学ニ入り益ス学理ノ蘊奥ヲ極メテ以テ其實ヲ結ビ、大ニ国家有力ノ士トナリ、其尽ス処ナカルベカラズ。故ニ諸子ノ前途尚遠遠ニシテ、又諸子ノ責任ノ大ナルコトハ諸子自ラ信ズル所ナラン。諸子猶百折不撓ノ精神ヲ涵養シ、倍ス進ンデ已マズ、益ス健康ニシテ、益ス勉勵シ、益ス気節ヲ尚ビ、益ス徳義ヲ重ジ、以テ国家ノ隆盛ト福祉ト

ヲ将来ニ期シ、其自ラ信ズル処ノモノニ負カザランコトヲ希望ニ堪ザル所ナリ。

聊カ所思ヲ陳テ、祝詞ニ代フト云爾。

明治二十五年七月十日

第五高等中学校教授医学部主事 吉田健康

九月に入つて、第五高等中学校の授業料規程を更正し、全額拾五円を三学期に分納させることとし、これに医学部進級及び卒業試問規程を加え、従来の医学部規則を廃して、第五高等中学校及び医学部の諸規定を統一した。

なお、九月頃の長崎病院の外來新患者数は平均一日四十余人で、中でも内科外科・はその大多数を占めていた。そして外科診療所では三人のブソリアジスを診療したと云う。

さて、帝国大学名誉教授エルウィン・ベルツはドイツに一ケ年間、帰国の途次、九月十一日に長崎に來遊したが、東京において教育を受けた医学部教授たちは迎陽亭に参集し、送別会を開いた。ベルツはこの時、日本医学の前途の多望を祝しているが、翌年、アメリカのシカゴで開催される博覧会を見物して帰朝する予定であつた。

十月に入り、第五高等中学校記念日を十月十日、医学部記念日を四月十日と定めた。

ベルリン大学眼科学教授シルシュベルグ博士（眼腫瘍に関する報告や硝子体中の異物の電気磁石による除去法の發明などの業績があり、グレーフエの門人として知られていた）はアメリカ訪問の帰途、九月十三日、横浜に入港、数日間、滞京した後、横浜を解纜したドイツ船ニルベルグ号に搭乗し、十月十一日、長崎に入港、翌十二日、長崎病院を視察したが、種々談話の後、各診療所、病室等を廻覧した。

十月二十六日、本学部生徒は修学旅行に出発した。栗本東明、高畑挺三、高山尚平、東次郎、野村精一、鈴木貞政、一瀬猪三郎、関屋十八、伊藤禎次郎、三輪与一、小柳某氏等、教職員の引率により総員百七十二名、一中隊を編成したのであるが、出発に当り、大谷周庵は修学旅行上の注意を与え、終つて修学旅行の軍歌を唱い、次に天皇陛下の萬歳と医学部の萬歳を三唱し、ラッパを携えて校門を出、出島の波止場より筑後川丸に搭乗し、長

崎港を出帆、翌二十七日、三角港に上陸した。この港では第五高等学校区域協議会に出席中の主事吉田健康が出迎え、吉田健康は一場の告諭を与えた。この日、三角港を発し、八代内海を経て鹿児島湾に入り、夜、鹿児島港に入った。鹿児島島の卒業生の出迎えを受けて波止場の上陸し、第一、第二小隊は山下町郷田方に、第三小隊は朝日通り富山方に分宿した。二十八日、鹿児島高等学校造士館に至り、明治十年の西南の役の戦跡を見学後、城山の西郷南洲の遺跡及び浄光明寺の南洲等の墓碑を廻り、鹿児島病院を視察した。その夜、琵琶会の催があり、二十九日、汽船那覇号に搭乗して浜の市に向い、上陸後、葛坂を経て霧島宿に到った。三十日、霧島神社に参詣後、噴火口に至り、天茅鉾を見学、温泉に浴した後、梵字名、仙人瀑を訪ねた。三十一日、霧島を発したが、この兩日、霧島の噴火の様子は誠に凄しいものであった。一隊は宮内村の鹿児島神社参詣後、加治木に入り、それより汽船那覇号に搭乗し、鹿児島に至った。十一月一日、桜島に赴き、柳花亭に慰労会の催があり、再び薩摩琵琶を聞き、

木曾川丸に搭乗して同港を発し、翌二日、長崎に入港したのであったが、病院その他の事務によって一行に加わらなかった職員等は一行を出迎えた。一行は出島波止場の上陸し、午前十一時、医学部に帰著したが、そこで、吉田主事の演説があり、二十分後に全員の無事を祝して解散した。本学部では、しばしば薩摩地方に修学旅行を試み、明治三十一年二月末から三月上旬にかけて行った際には、鹿児島県伊佐郡東太良村附近において発火演習をなし、仮設敵と本軍とに分って猛烈な戦闘を行った。当時の淡煙煥史の「薩山肥水」(研瑤会雑誌、二十六号所収)より文を抄録すると「二月廿八日……砲声殷々として山岳を震はし將に突貫を為さんとするに及んで戦闘中止の喇叭朗々として響き両軍各々兵を収む……」などの記述があり、軍国主義的兵式体操の一端を覗える。

明治二十五年十月三十一日調査の第五高等学校医学部の職員は「第五高等学校一覽自明治廿五年至明治廿六年」第十五章に見えるので、それより抄録して次に掲げる。

医学部主事
教授

吉田 健康 福井

(組織学、解剖学)

助教授

東 次郎 兵庫

(内科学、内科臨床実習)

陸軍一等軍医

吉田 健康 福井

(化学、製薬学、調剤学、調剤学、礦物学)

森永 伊吉 佐賀

(内科学、内科臨床実習)

医学博士

大谷 周庵 東京

(物理学、動物学、兼教務掛書器專担)

高屋 賀祐 京都

(外科学、外科臨床実習)

医学士

田代 正 福井

(体操兼舍監事務取扱)

鈴木 貞政 東京

(内科学、病理学、内科臨床実習)

医学士

栗本 東明 山形

(体操兼舍監事務取扱)

勲八等

関屋 十八 宮崎

(外科学、外科病理学、外科臨床実習)

医学士

高畑 挺三 愛媛

舎 監
書記

(薬物学、産科学、婦人科学、産科婦人科臨床実習)

医学士

高山 尚平 岡山

(教務掛兼庶務掛舍監事務取扱)

野村 精一 石川

(眼科学、眼科臨床実習)

医学士

牧田 安藏 京都

(会計掛)

會計主務官

野村 俊輔 山口

(生理学、組織学、衛生学)

医学士

久保 成治 奈良

(庶務掛)

資金部物品會計官吏

高島 市郎 福井

(裁判医学、組織学、解剖学)

医学士

小山 龍徳 熊本

(英語)

嘱託員

池辺栄次郎 長崎

(調剤学、植物学、薬局方、生薬学、分析)

薬学士

池口 慶三 兵庫

(病理解剖助手)

川添 正道 長崎

医学部在勤

医学部在勤

第十七節 第五高等学校と医学部

(生理助手)

中野 光蔵 福岡

(庶務掛兼教務掛)

三輪 与一 長崎

(化学助手)

同 一ノ瀬雄三郎 長崎

(会計掛)

伊藤 広次 大阪

(寄宿舎衛生事務取扱兼薬学助手)

同 伊藤禎次郎 長崎

「第五高等学校一覽 自明治廿五年 至明治廿六年」に見える第五高

等中学校医学部薬学科の課程を次に示そう。

(教務掛)

雇員

京 直温 長崎
医学部在勤

第五高等学校医学部薬学科課程表

学 科	学 程	第 一 年			第 二 年			第 三 年		
		第一期	第二期	第三期	第一期	第二期	第三期	第一期	第二期	第三期
英 語	講 義	三	三	三						
動物学	藥用動物学	三	三	三	三	三				
礦物学	藥用植物学並実習	三	三	三						
物理学	理 論									
化学	理 論 実 習	六	六	三						
分析	同				六	六				
生薬学	定性定量応用			六	六	九	九	一〇	一〇	一〇
製薬学	記述鑑別実習				四	七	七			
	顕微鏡用法									
	理論製煉実習				三	三	六	一〇	一〇	一〇

第六章 第五高等学校医学部

調剤学	薬局方	解剖、常蔵薬、毒薬、劇薬、極量、暗記	合 計	兵 式 体 操	時 間	薬学科学科課程表								
						動物学	植物学	鉱物学	物理学	化学	調剤学	分析学	製薬化学	同 上
理論 実習						薬用植物学	薬用植物学	実習顕微鏡用法	講義 実験	講義 実験	講義 実験	定量性 講義	実習	同上
			二五	三		三	三	三	六	四				
			二五	三		三			六	四	三	三		
			二八	三		三	三	三	三	四	三	三	六	
			三〇	三		三	三	三	六	六	三	三	八	五
			三〇	三					五		五	三	一〇	五
			三〇	三		三		三			四		九	五
			三〇								二			一〇
		四	三〇								四			一〇
		四	三〇								三			一〇
		四	三〇											

「第五高等学校一覽」自明治廿六年至明治廿七年に見える薬学科の課程は次の通りで、前年と些か異なるところがある。

第十七節 第五高等学校と医学部

衛生化学	同	上	三	八	七	六
裁判化学	同	上	三	三	六	一〇
薬品鑑定	実習	同上	九	八	一〇	
薬局方	日本薬局方解釈并ニ外国薬局方要領		三			
体操	兵式体操	三	三	三	三	
合計		二二	二二	二八	三四	三二
外国語	随意科トシテ英語若クハ独逸語ヲ三ヶ年間通シテ凡ソ三時間ヲ課ス		三二	三二	三五	三五
○本課程ハ仮ニ施行スルモノナリ						

明治二十六年（一八八二年）一月二十五日、第五高等学校校長嘉納治五郎が文部省参事官に転任したので、第四高等中学校校長中川元が後任校長に任ぜられた。

三月六日、北白川宮能久親王殿下が医学部に親臨され、教場等を台覧された。北白川宮は当時第六師団長であったが、この際、医学部では本学部沿革並びに一覧を奉呈した。

四月、第一回監獄医協議会が東京で開催されている。前年より大々的に喧伝していたアメリカのシカゴにお

けるコロンブス世界博覧会へ、本学部より妊娠後四週間の人胎一、肝臓ジストマ虫卵五、その他を出品し、同会より六月二十三日附の来状があった。

八月二十四日、勅令第八十七号を以て、第五高等中学校職員は校長一人、教授二十五人、助教授十五人、書記十人と定められた。

十月三十一日、地方庁の衛生事務は警察部の所管となり、長崎県でも移管されるに至った。

十一月に入り、文部省の允裁を経て第五高等中学校職

員の服制を定めた。

同月三十日、医学科並に薬学科課程表中、裁判医学を法医学と改め、又、英語を外国語と改め、これを随意科とした。

こうして第五高等学校医学部は次第に整備を進めて行った。